

インタビュー2

押尾章治

建築家

〈みんなが集まるお寺〉をつくる

みんなてら事業部プロデュースのもと、

建築家の押尾章治氏が設計を手がけたお寺の施設が4件竣工した。

みんなてら事業の運営理念のもとで、それぞれの施設がどのようなコンセプトで

設計されたのか、お寺との計画・設計時のやり取りも交えて紹介する。

みんなてら事業部について

——みんなてらのプロデュースで押尾さんが設計を手がけた納骨堂などが4件ほど実現していますが、まずはみんなてら事業部について説明してください。

みんなてら みんなてらというのは、名前のごとく、みんなが集まるお寺をつくることを目的としています。

そのためには、お寺に集まって来た人たちに、自分が今あることのかげがえのなさや人と一緒にいることのありがたさみたいなものを気軽に感じて楽しんでもらえることが必要です。そんなことができれば、お寺やお墓の環境だって当然良くなっていくはずだし、さらにその先に、前向きで素敵な共同体などもつくれるかもしれない。みんなてらとは、お墓とかお寺事業を媒介に、人が集まって一緒に盛り上げていける場所をつくる仕組みだと考えています。

当然そうした人の集まる楽しい祈りの場所づく

りには、かなり緻密な施設計画やデザインが必要になってくるわけです。でも以前は、設計士さんなどに私たちが考えるイメージがなかなか伝わらなかった。「誰かに繋がるような雰囲気」とか、あるいは「見えない世界に通じ、祈りを感じることでできる空間」とか、宗教的な感覚の言葉が共有できても、それをデザインに置き換えられる人って意外といなかった。ほとんどの設計士さんは技術的な話や予算の話ばかりだった。なかなか難しいと感じていたところに、押尾さんと出会ったのです。

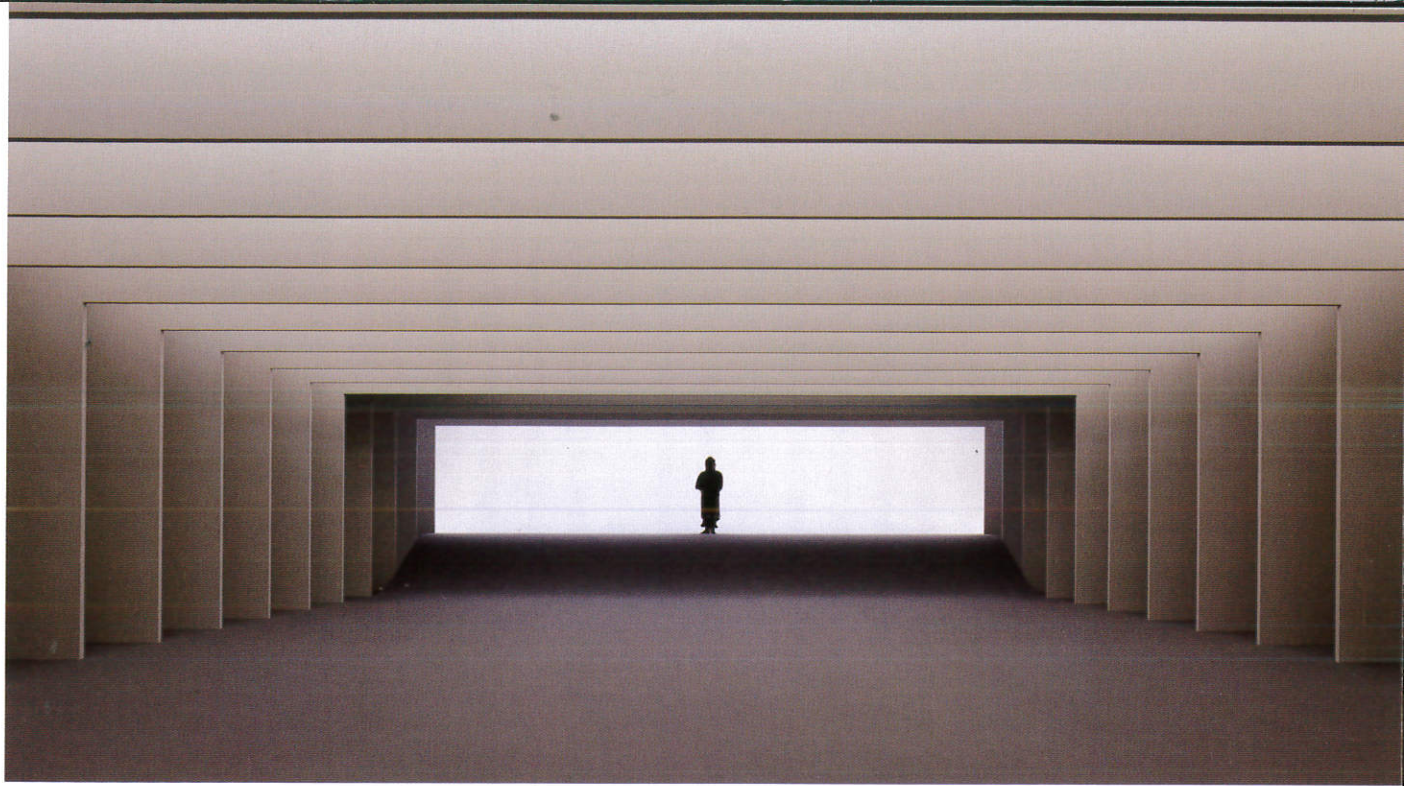
宗教建築の設計

——押尾さんは、建築家としてこれまで住宅や商業施設、美術館などさまざまな種類の建築を手がけられています。具体的な実現例の話の前に、宗教の世界で設計をするようになったきっかけや、お寺の設計について考えられていることなどをお話いただけますか。

押尾 美術館や展示空間のデザインの仕事などでは、展示物の見せ方に一番心を砕きます。どんなに小さな美術品でも、必ずより大きな世界観（たとえば作者の思想や思考、その時代との関係など）を孕んでいるからです。それらも一緒に、鑑賞者に対して短時間で分かりやすく伝えられることが大切なのだいつも思っていました。

そうしたらある時目の前に仏像がやってきた。その信仰の形の美しさに触れると、これはやはり鑑賞の対象というよりは礼拝対象だなんて思っただけです。それからですね、鑑賞と礼拝の客観的な違いについて思いを巡らせるようになったのは。いずれにしろ、仏様の持つとても大きな世界観を伝えなければならぬのは同じわけですが。

直接のきっかけは、以前手がけた「ひかりのギャラリー」と「対話のギャラリー」というふたつの礼拝空間のデザインでした。そこは礼拝堂で

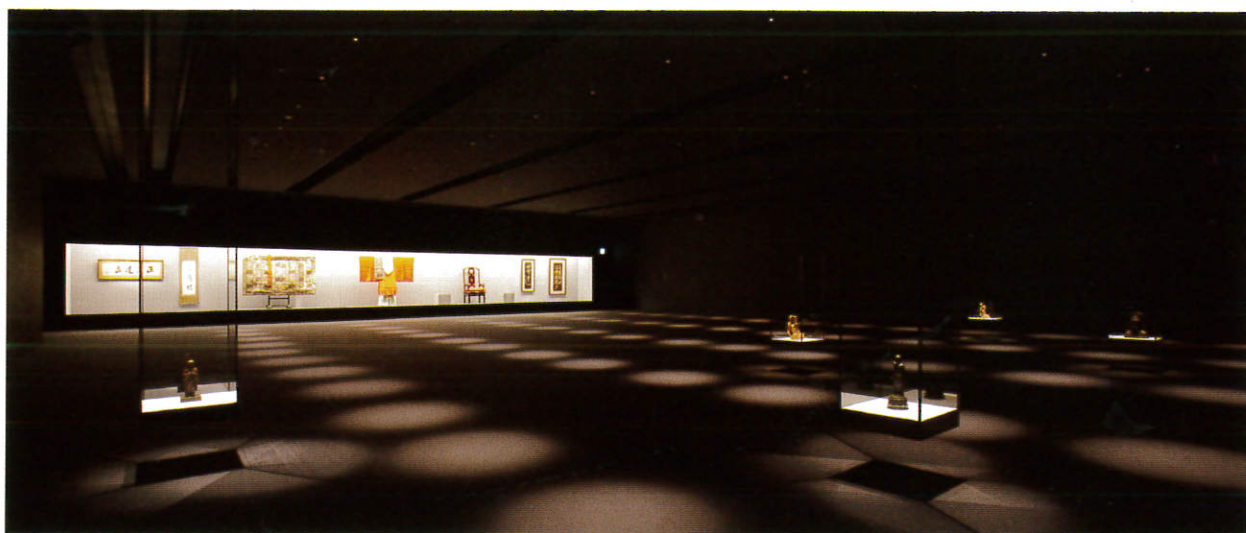


「ひかりのギャラリー」：白い門型のフレームの光の連続が、中央の「出山の釈迦像」へとつながる。

ありながら、仏師でもあった開祖様の作品（仏像）を鑑賞できるスペースでもあった。加えて、写真や現代美術の展示も鑑賞できる「誰に対しても開かれたスペースをつくる」という企画でもあった。つまり仏像に対する礼拝と美術品としての鑑賞という異なる世界をひとつに融合するという、少し特殊なデザインテーマだったのです。この時の経験から、自分の礼拝空間に対する思いがどんどん広がりましたね。

宗教という、信仰の伝播する仕組みは大きく分けてふたつあると思います。ひとつは教理や教典など、言葉として伝えていく部分。形が伴わない部分。もうひとつは、仏像や礼拝空間（お寺や教会）など、物理的な形を持ったモノの部分。この両方がある。

後者の仏像や空間がありがたいのは、つくられて何百年も経っているものであっても、そこに行けばつねに、仏様とその時点で向き合う生の体験が成り立つこと。これは何百年経とうが変わらない。（その分、形を残すということが本来にとっても責任重大なことだと痛感しますが。）礼拝行為を、空間やモノの体験を通してより大きな世界を想像させる行為だとしてとらえてみると、建築と宗教の世界はそれほど乖離しておらず、むしろ一体とすることが本来的であると考えるようになりました。



「対話のギャラリー」：天井から吊られたガラスケースが浮かぶ。仏像の展示は床座で鑑賞。ガラスケースは移動可能で仏像の種類によりレイアウトが変えられる。



来迎寺納骨堂（福岡県豊前市）。お寺前の田園風景と里山を背景に佇む。ライトアップされて佇むさま。外壁は砂模様吹付け

豊前市・来迎寺の納骨堂

——次に実現した建築についてうかがいたいのですが、九州でも納骨堂をつくられていますね。みんてら この来迎寺というお寺は福岡県の豊前市にあります。九州は、古くから納骨堂の慣習があり、墓石よりも納骨堂が選ばれる下地があった。特に昭和40～50年代は納骨堂ブームで、こぞってコンクリートでつくられました。それらも老朽化していった。そして時代も変わり人々の感覚やとりまく状況がいろいろと変化の中で、従来の独特な納骨堂建築だけではさまざまなニーズに対応できなくなった。そんな中で、この地方にあるお寺としては画期的なデザインの提案をしたものが受け入れられて実現したものです。

押尾 みんてらプロジェクトに関わり、お寺を見て回る機会が結構増えて改めて思うのですが、木造の何百年というお寺から都会のビル型のものまで、どんなお寺にも共通しているのは、必ず金銀の天蓋や羅網などの絢爛豪華な装飾、色鮮やかな五色幕や〇〇、または竜の水飲みや蓮の花の銅製のギミックなどがあることです。当たり前の話かもしれませんが、そうしたお寺特有の設えは、いにしえの庶民からしてみたら、この世の物とは思えない華やかさや祝祭感があつたのではないのでしょうか。ある意味そうしたものに触れたくて、みんなお寺に行った。日常には有り得ない異質さというものが、信仰のきっかけとしてはとても有効だったのでは

う。それでこのお寺でも、周囲の山里の自然環境に対して、少し浮き立つような非日常感を挿入したら人の意識が集められるのではないかと考えたのです。そうしたときにモダンなエッジの効いた造形がちょうどよい異質さをつくり出すのではないかと思いました。

——逆に都市部でつくるならこのデザインはなわけですね。

押尾 そうですね。田舎の暮らしやお寺が、じっくり馴染む自然環境にあるからこそですね。だから対比的にモダンなデザインが、環境から離れて独自に浮き立とうとする力を出せるんです。

——この夜景の写真はとも変わって見えますね。この斜めに突き出した庇と袖壁の部分が、照明の効果と関係しているのですか。

押尾 この斜めの部分は、内部の光を放射状に外に広げていく導光板のような役割です。観音像が背負っている光背と同じで、光の広がり方を表しています。でも同時に、この庇と袖壁があることの効果で、背景の山に光の漏れが映し出されずに、正面からの光のみで立ち現れているような佇まいとなる。ちょうど舞台の書割りのような感じで、虚構のような雰囲気も出てきますね。

みんてら この来迎寺さんで一番感じたのは、お寺の可能性ですね。住職は、たぶん、この場所に対して異質なものの印象を最初はもたれて、実はこのデザインには少し引き気味でした。でもやり取りをしていく中で、どんどん可

能性を感じ始めてくれたのです。これをきつかけに何か変わるかもしれない、これからのお寺としては、檀家だけではない、もう一步先に行くにはこういう部分で変えていかなければならないのかなと…。

——檀家だけではないというのは？

みんてら 小さな町なので、檀家の数は決まっています、かつ、過疎化で減る一方なんです。そうなると、豊前というところよりもっと範囲を広げていくためには、勇気を持って殻を破らなければならない。ちよつとどうしようかと迷われたけれども、でも破ってしまえと。

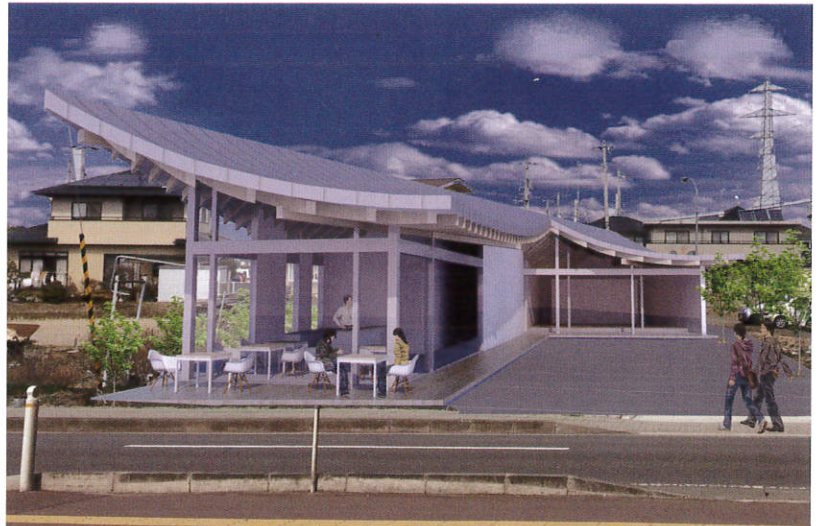
パスを見てまずびつくりされたんですが、でもだんだん乗ってきてくれて、最終的にはこの景色を見た時に、後ろの里山とお寺とこの納骨堂とが繋がったというのを感じられたのかなと思います。

——環境と新たな繋がりをもつと同時に、納骨堂ということで過去と繋がり、かつ、未来へ繋がっていくための施設でもあるんですね。

みんてら この施設を1年以上待っていた人たちは安心していただきました。自分のことだけじゃなくて、過去のご先祖さんと自分とそしてまたその先に繋がったという安心感ですね。

寺子屋の施設計画

押尾 心ちはお寺の位置から少し離れた新興住宅地の一角につくる施設の計画です。公民館的な寺子屋というか、お寺が積極的に地域活動



道路側から見る。向かって左側がロードサイドのカフェ、右奥が礼拝堂。

サイクロイド曲線による屋根の反りが特徴的

押尾 日本のお寺の屋根の反りは、このような曲率で作られることが多いのです。サイクロイド曲線というのですが、もはやこの曲線はお寺の屋根のカーブだと認識されていますね。今回はそうした伝統的なデザイン要素を取り入れ、新興住宅地内であっても、どこなくお寺が運営する施設という雰囲気をつくらうと思いました。

みんてら 住職さんは建物に対してとても慎重な方が多くて、従来の寺院建築の形を超え過ぎてしまうとついてこれなくなってしまう。「そこまではうちではできません」と。そういうところで古来の建築様式を思わせるものが入ってくると安心するんですね。

押尾 さらに今回は、その曲線の組み合わせでつくった屋根の軸線の向きを、少し離れたお寺の本堂がある方向に向けてとりました。建物本体の向きはそのまま、屋根の軸線のみずらさず感じて。こうすることで遠くに離れているお寺とも一対の関係ができる。このずれた屋根の由来を説明するだけで、みなさん大変喜んでくれますね。連続する垂木の反りなども、見る人によって伝統的に見えたりモダンに見えたりと、面白さを感じてくれるようです。

みんてら この施設は最初に住職さんのテーマというか強い思いがありました。ひとつは学びの場所ということ、人と人が繋がる場所ということ。あと、楽しくないといけない。こうした大きい思いがあったんです。

や文化、伝承などを担っていこうとしている施設ですね。

計画としては、地域の人が集まれるカフェと礼拝のできる広間を中心に、地域振興のために使う倉庫や住職の住居などがあり、他にもお庭を地域に貸し出すことなどを予定しています。これは本当に新しいお寺のあり方で、ある意味、みんてら的な考えにとっても近い施設だと思っています。

——住宅地の中にある寺子屋として、屋根のデザインが特徴的に見えますね。



俯瞰カット。屋根の軸線が斜めに指し示す方向にお寺の本堂がある

押尾 地元の演劇や絵画などのサークル活動をお寺施設がサポートしてつながりをもつことで、地域との関係を見直そうとしているんですね。近隣の大学の、テニスサークルの合宿所の役目などもする。こうした地域の振興に関わる機能的なスペースに、礼拝の対象である仏様がいらっしゃるというのがとても新鮮だと思います。最近の公共的な施設にはないですが、お寺とは、本来はそういう場所だったのではないのでしょうか。特に震災以降、改めてそうした役割が見直されて

いるようにも思えます。

—— リクエストにあった「楽しい」というのは、具体的にはどういうことでしょうか。

—— みんてら 地域の NPO がここで何か活動するとか、老人クラブの方が皆さんに何かを披露し提供することで、自分も楽しむし観る人も楽しめるというような活動も想定したお寺の施設ということ、従来からすると、お寺じゃないようなお寺なんですね。運営そのものはこういうことになってくると、お寺独自ではできないんです。

—— カフェが入る時点で、もう難しいですよ。みんてら そうすると、地域の人たちとも共同運営というモデルをつくっていかなきゃいけない。それが前提での計画ですね。

—— お寺の機能が拡張していくわけですね。

押尾 そうですね。お寺が一方的に何かを施すとかではなく、地域の皆さんに運営にも参加してもらって、都合よくお寺を活用して楽しんでもらう。そうしたお寺と地域が経済的にも社会的にも補完関係になるような運営が成り立って初めて、地域とその信仰の核になるお寺が、本来的な共同体のような纏まりを形成できるのだと思います。

—— 施設だけでなく、実際の運営、そして地域とかかわり方という点でも完成するのが楽しみです。

押尾 従来の信仰のためだけの場所として人々を集めていたお寺空間は、今、もっと多面的に

社会と関わっていくお寺空間へと変ってきていますよね。従来のまだまだと人は集まらない。そうした社会の変化に応じていく上では、まずデザインや計画的な視点という従来のお寺にはなかった建築的な手法で見直し、それを地域や社会と連動した運営の中に当て嵌めていくのが有効です。もちろんすべては仏様の存在を中心しながら。そうして現代の社会との距離を縮めることで、地域に根差した賑わいのあるお寺空間が再生されるのだと思っています。

※誌面で紹介した作品の詳細について、また、これまでの竣工作品について知りたい方は、みんてら事業部までお問い合わせください（お問い合わせ先電話 048-2541222 メール info@mintera.jp URL <http://www.mintera.jp>）。



押尾章治

1964年千葉県生まれ。建築家。明治学院大学法学部卒業。隈研吾建築都市設計事務所統括設計室長などを経て、一級建築士事務所UAを共同設立。様々なタイプの住宅作品や商業施設、礼拝施設や展示施設などを手がける。2009年、「ひかりのギャラリー」「対話のギャラリー」で、Faith & Form(米)IFRAA International Awards(礼拝空間部門)